

J・シューレ=カナール著

『黒アフリカ史』

Jean Suret-Canale, *Afrique Noire: L'Ère coloniale, 1900~1945*, Edition Sociales, Paris, 1964, 636 p.

I

今日、アフリカ諸国の政治指導者たちは、そこにさまざまなニュアンスの差があるにしても、自らの政策課題として「アフリカの政治的統一」、「アフリカの経済発展」を掲げている点で一致している。しかしこのような政策課題の実現の可能性を検討する視点から、アフリカの今日の状況を見ると、そこにはさまざまな問題がよこたわっている。

その問題の一つにこれらの諸国と旧宗主国との過去・現在における政治的・経済的関係がある。とくに本書が対象とするブラック・アフリカのフランス語圏諸国は、ギニアを除いて独立後もEEC連合制度のもとに旧宗主国フランスと、今日なお密接な政治的・経済的関係を維持し、国際政治の舞台におけるこれらの諸国の行動にはフランスの強い影響力が読みとれる。そこで、これらの諸国とフランスとの政治的・経済的関係の歴史の変容の過程を、帝国主義的植民地支配→民族運動の勃興→政治的独立、という一般的な理解をさらに一步深めてこの地域に則して具体的に検討を加えることは、きわめて今日の意義をもつ作業であろう。

そのような意味で、旧仏領ブラック・アフリカの「植民地時代(1900~1945)」の歴史を扱った本書は、単にこの地域の歴史研究者のみならず、広く今日のアフリカの動向に関心をいだくすべてのものにとっても、きわめて貴重な文献であるといえよう。

II

著者、シューレ=カナール(Suret-Canale)は、現在パリのマルクス主義研究所の副所長の地位にあり、アフリカ史を専門とする歴史学者として、またマルクス主義理論家として、その名はわが国においても一部の人々の間にはよく知られている。第2次大戦前、学生時代に旅行したベトナム、西アフリカにおいて、植民地抑圧のすさまじさをまのあたりに見たことが、第2次大戦後、反植民地主義の実践活動に身を投ずる直接の動機になったと

著者自身が語っている。1946年から1949年まで、セネガルのダカル高等学校で教鞭をとるかたわら、RDA(Rassemblement Démocratique Africain)を通じて、アフリカの独立運動に参加し、1949年には現地の労働争議を指導した責任を問われて、アフリカから追放された。しかし1959年には、独立を達成したギニアから招かれて1963年まで、同国に滞在しておもに教育面を通じてギニアの国家建設に尽力した。

このような実践活動のかたわら、フランス語圏ブラック・アフリカの歴史研究にたずさわり、3巻からなる大著『黒アフリカ史』の著作にとりかかり、すでに1、2巻が出版されている。

本書は、この3部作の第2巻にあたるもので、第1巻『黒アフリカ史——その地理・文明・歴史』は1961年に出版され、すでにわが国でも邦訳出版されている(註)。

第1巻においては、この地域の自然的条件、古代文明の紹介とともに、この地域がフランスによって植民地化される以前の歴史が描かれているのに対して、第2巻にあたる本書の構成は、大きく2部に分かれ、第1部では「植民地体制の確立」期として第1次大戦までの時期が、第2部では両大戦間、および第2次大戦の時期が「植民地体制の最盛期」として描かれている。

全編600ページにのぼる本書を、しかも叙述的な本書の性格からして、限られた紙数でその内容を要約することは至難であり当をえないと思われるので、ここではやや羅列的にはなるが本書の内容というよりもとりあつかわれている事項を要約しておく。

第1部、第1章では20世紀に至ってこの地域内の輸出入流通が、完全にフランス資本の掌握するところとなり、さらに競争を通じて少数の大商社の独占化・系列化が進行したことを豊富な資料によって示す。またこの時期の仏領赤道アフリカ(AEF)における植民地化を特色づけるものとして、いわゆる「特許会社」に与えられた大コンセッションの実態と、それにまつわるゴー・トク事件をはじめとする種々の植民地スキャンダルが記述されている。そして最後にこの時期における植民地経営の経済的結果が、若干の貿易統計によって示される。それらの数字はいずれも、この時期において、フランス本国とこの地域の貿易量が著しく拡大したことを物語っている。

第2章では、この時期の植民地経済の発展が、この地域の伝統的社会構造に与えた影響を「貨幣経済の発展」、「奴隷制の崩壊」、「伝統的社会構造の解体」、という三つの視角から考察する。もっとも読者の関心をそそる問題

ではあるが、提示される資料はごく断片的なものであり、一般的命題としては、資本の原蓄過程に一定の役割を果たすべき前近代的な高利貸の発生もこの地域ではほとんどみられず、そのような高利貸の役割自体が、独占的フランス資本の手にゆだねられていたという指摘があるにすぎない。

第3章では、植民地政府の行政機構、原住民政策について述べられている。よくいわれる「同化」(Assimilation)から「協力」(Association)への原住民政策の理念における変化も、「協力」とはいわば「馬と騎士との協力」を意味し、被植民者の立場からみれば、それは具体的に何の変化をも意味しなかったということ、多くの具体的事例をもって示している。しかし、「同化」政策といっても、この地域の伝統的社会構造の形態までも破壊しようとしたのではなく、首長制もその形態のまま、植民地行政機構の末端機構として組み入れられたのであり、首長が存在しない地域には新たに首長をつくりだしさえしたという。そして首長とはいえ、今やその権力を支えるものは植民地政府であり、実質的には植民地政府の下役人に変質していったという。

第4章「鎮圧」では、この時期における植民地支配の奥地への浸透、鉄道の敷設などの過程で現われた原住民側の抵抗と、その鎮圧のいくつかの具体例が記されている。モーリタニア地域のマ・エル・アイニン(Ma El Ainin)の抵抗、コート・ジボワールの森林地帯におけるアングルヴァン総督(Angoulvant)の徹底的な制圧政策の展開などがあげられている。

第5章は第1次大戦と、この地域に対するその影響について述べられている。まずフランスとドイツとのアフリカ中部の領土権をめぐる対立を利用してフランス政府から多額の補償を要求したフランスの大特許会社N'goko-Sanghaにまつわるスキャンダルを通じて当時の仏領赤道アフリカの状況が述べられている。

つぎにこのような植民地の状況を背景に、第1次大戦前夜、フランス国内において反植民地勢力はどのような状態にあったかということに視点を移す。このころになると19世紀末に現われた右翼的な反植民地主義はかげをひそめ、反植民地主義勢力はもっぱら左翼によって構成されていた。しかしかれらは「植民地侵略の犠牲者との連帯」ということを強調するよりも「フランスの国内政治における戦術的配慮から、この問題(植民地問題)がとりあげられ」、「植民地政策は、金融資本の利益追求のために犠牲にされる兵士を擁護するという名目で非難さ

れた」と著者は批判している。

つづいて第1次大戦中、ヨーロッパ戦線にかりだされた黒人部隊について述べられている。第1次大戦末までに徴兵された黒人の数は累計20万人にのぼり、そのうちヨーロッパ戦線に従軍したものは16万3952名、公式発表でも2万5000名ちかい戦死者をだしたという。これらの数字を引用し、その戦死者の割合が黒人兵の場合、とくに大きかったことを著者は重視している。この徴兵をはじめとする植民地支配の強化にともない、各地に発生した暴動に関する資料が提示されたあと、トーゴ、カメルーンの併合の推移について若干ふれられている。

最後に、ロシア革命の影響についてふれ、それが徴兵された黒人兵などを通じてはじめての「民族的覚醒をもたらす」契機になったにしても「白人優位の神話は、それほどゆりうごかされることなく、植民地体制はいまなお安泰であった」と結論している。

第2部「植民地体制の最盛期(1919~1945)」では、第1部とほぼ同じような章立てで、植民地体制が相対的に安定を保ったこの時代の状況が述べられている。

第1章「経済開発」では、この地域の植民地経済の特色として、帝国主義的植民地搾取の一般的特色が、「農業・鉱業生産に資本を投下した独占資本が、主要な役割を演じること」にあるとすれば、この地域は例外であり、この時期、この地域の経済に支配的役割を演じていたのは大商社であり、この地域に投下された資本の絶対額が少ないうえに、その産業別分布をみれば、約50%近くが商業・不動産業・銀行などに投下されていたことなどを、若干の統計資料を引用して示している。つづいてこの地域の貿易・金融を独占的に支配していたS C O A (Société Commerciale de l'Ouest-Africain), CICA (Société Commerciale et Industrielle de la Côte d'Afrique), BAO (Banque de l'Afrique Occidentale)など大商社、銀行と、その系列について概観している。

さらに港湾・鉄道・道路などの建設事業の進行について若干ふれたのち、約100ページにわたってこの時期におけるこの地域の生産力構造とその発展の状況がいくつかのトピックスを通じて述べられる。それらは「輸出作物栽培の発展」、「油脂作物の栽培」、「原住民貯蓄組合」(S. I. P.—Sociétés indigènes de Prévoyance)、「移民と強制労働」、「土壌の悪化」、「鉱山開発」、「景気変動と開発事業」、「ニジュール開発」、「世界恐慌」、「第2次大戦前夜の状況」、などである。そして最後にこれらの「経済開発」は、原住民にとっては、食糧生産を犠牲にし、土壌

条件を無視した落花生など輸出作物の栽培の拡大を意味し、いっそうの貧困化を招いたとして、植民地政策をはげしく弾劾している。

第2章では、ふたたびこの時期の植民地行政がとりあげられ、まずその行政機構について、つぎに、植民地体制の庇護をうけ、またその補完的な役割を演じたキリスト教ミッションの実態について述べている。そのほかに本章では植民地政府が行なった文化教育政策・医薬・衛生事業についてもその実態が痛烈な批判をまじえて紹介されている。

第3章は、この時期の「社会的・政治的動向」に焦点をあてている。原住民の社会生活の変化については、とくに結婚問題に焦点をあてて考察されている。また政治的動向としては、原住民の抵抗運動を運動の歴史的発展を加味して初期的な武力抵抗・宗教運動・近代的政治活動と三つに分類し、それぞれに該当する例を提示する。第1の分類に属するものとしては、1935年まで断続的に存続したモリタニア北部における抵抗、コンゴ・ルワンギの大暴動(1929年)、第2の分類に属するものとしては、イスラム系のシェイク・ハマラー (Cheikh Hamalah) の運動、キリスト教系の Kimbanguism, Matsuranism などが紹介されている。第3の分類に属する運動の本格的な展開は第2次大戦後をまたねばならないが、その中核をになう階層としての教師、復員兵、鉄道・港湾労働者らの台頭とその動きについてふれ、これらの動きに対して植民地政府側は、各階層を分断して対立させる工作を講じていたことを指摘している。

最後に第2次大戦について一節を設けて、まずフランスがドイツに占領され、ペタンのヴィシー政府と、ドゴールの解放軍側に分裂したことは植民地政府の要人の間にも動揺・分裂をおこし、紆余曲折を経てドゴール派の支配下にはいるまでの過程 (AEF—1941年, AOF—1943年) が描かれる。しかしこの分裂抗争は、原住民の直接あざかりしらぬことであり、かれらにとっての第2次大戦の直接的影響としては、戦争勃発とともに植民地行政に右翼の官僚の勢力が復活し、権力の乱用が著しくなったこと、「戦争協力」の名のもとに、徴兵・役務・物資の調達が強化されたこと、宗主国と貿易をたたれることによって極端な物資の不足に陥ったこと、かくしてかれらはますます悲惨な状況に陥っていたことが、いくつかの挿話をまじえて述べられている。

最後に1944年ブラザビル会議について言及し、そこで示された植民地原住民に対する若干の配慮は、戦後にお

けるアメリカ帝国主義の勢力拡大をおそれたドゴールの戦術的配慮から行なわれたものであり、フランスの植民地支配に対する基本的な考え方における何らの変化も意味するものではなかったときめつけて、この章を結んでいる。そして第2部のあるいは全編の叙述に対してとくに結論の章を設けることなく、いわば未完のかたちで本書を終わっている。

(注) 『黒アフリカ史』、野沢協訳、理論社;1964年。本書の「訳者あとがき」に、著者シュレーカナルについての詳しい紹介が付されている。

III

この地域のこの時代を総括的にとらえた文献が皆無の状態では、断片的な資料に依拠して、この地域の歴史を描こうとすることは、きわめて困難な仕事であろう。その意味で、まずこの著者の業績は高く評価されなければならない。また、ほとんど植民地体制の側から提示されている資料に、著者の唯物史観に基づく反植民地主義の立場から批判的検討を加えることによって、植民地の現実の姿を描きだそうとする試みは成功している。著者自身も自覚しているように本書で用いられた資料のほとんどが植民地体制の側から提示されているものであるという事実は、本書の叙述の客観性を保証するものとして役立つ。

しかし、著者の唯物史観という方法的立場は、第1部・第2部の時代区分、植民地体制の側から提供される虚像に対する批判を除いては、全体の構成の中に生かされていない。したがって叙述は平盤で羅列的であり、全体としては雑然とした印象をまぬがれない。

これは一部には、「仏領ブラック・アフリカ」という地域設定にも起因している。すなわち、この地域が一つの全体としてとらえるのはフランスによって植民地化されという歴史的状況においてのみであり、それ以上に認識を深めようとするれば、かなり大きな地域差が浮かびあがってくる。またこのことは、本書にアフリカの歴史というよりも「フランス植民地政策史」の各論的な性格を与えている一因にもなっている。このようなこの時代の理解の延長上に、政治的独立を一応は達成したこの地域のアフリカ諸国をめぐる、今日の状況はどのように位置づけられるのか、これはつづいて出版を予定される第3巻の中心的課題となるだろうが、本書に関するかぎりそれを示唆するような著者の積極的な命題の提示はみられない。第3巻の出版がまたれるところである。

(調査研究部アフリカ調査室 原口武彦)